

# 「化学工学年鑑2018」の発刊にあたって

原野 安土\*

私が学生だった頃、化学工学の情報源はもっぱら「化学工学誌(化工誌)」や化学工業社の「月刊ケミカルエンジニアリング」でした(日本語しか理解できなかったことが原因)。そのため、紙媒体を端から端まで懸命に読むのですが、著名な先生の記事は言葉も内容も難解で、頭の中で化学工学はいつも霧に包まれていました。現在のように最新情報がネット上で容易に得られ、かつその記事も平易に書かれており、今の学生を羨ましく思うのですが…、いざ学生に研究に関連した論文を探してもらおうと、とんでもない論文を選んできます。これは能力の問題もあるかも知れませんが、多量の情報の中から有用な論文を選び出すことは、一人前の研究者でも容易なことではありません。化工誌が唯一の情報源でなくなった今、化工誌の役割は、多くの情報の中から信頼できる情報をきちんと整理して学会員に伝えることであり、そういう意味で化学工学を俯瞰する年鑑はその代表的な記事と言えます。

年鑑は例年と同様に第1章に化学工学一般、第2から7章は単位操作をベースとした基盤技術分野(6部会)、第8から15章は基盤技術を特定分野へ応用する展開技術分野(8部会)で構成しています。第2から15章は部会から「年鑑取りまとめ委員」を選出していただき、部会長と相談していただきながら各セクションの取りまとめをおこなってもらいました。第1章化学工学一般の「1.1 化学産業界の動向」につきましては、化学産業界全体を俯瞰しながら今後の動向を展望するという大変に難しい内容であり、2014年まで三菱化学(当時)、三井化学、住友化学の大手総合化学メーカー様に持ち回りで執筆していただいていたのですが、作業負担が大きいため、2015年からは化学工業に関する生産、流通、消費などの調査研究をおこなっている日本化学工業協会様をお願いしていました。本年度は少し視点を変え、化学工業に関する日刊の業界紙である化学工業日報様に執筆していただきました。「1.2 教育動向」と「1.3 学会動向」につきましては例年通り人材育成センターと戦略企画センターをお願いしました。各部会担当の第2から15章の内容につきましても、例年と一貫性を保つため、過去一年を振り返っての「国内外の動き」、「研究・技術動向」、「今後の展開」を中心に紹介してもらいました。さらに、読者に対して、「是非とも読んでほしいと考える最新の論文」を選定していただき、各章末の引用文献の欄で該当論文を太字でハイライトすることで、最近のホットな話題を読者が容易にフォローできるように工夫しました。是非とも専門分野外についても興味を持っていただければ幸いです。

私は学部時代から化学工学会にお世話になってきましたが、真面目に学会活動をおこなってこなかったため、昨年の4月より罪滅ぼしとして編集副委員長を引き受けまし

た。しかし、毎月発刊される本誌の編集業務に迫られ、小林正樹編集委員長が掲げられた編集方針(81巻10号の巻頭言)をなかなか実施できていないのが現状です。1年半が経過しようやく少し余裕(?)が出てきて、本年度は学会運営の透明性を確保するために「学会の窓」を新設、しばらく休んでいた「小特集」の復活などをおこないました。「学会の窓」は平成29年に理事会直下に設置された戦略企画会議からの情報記事を掲載するもので、学会全体の戦略企画の詳細をなるべく多く学会員に知っていただくことを目的としています。また、化学工学関連で注目される新しい技術や研究開発に関する最新動向、若い年代層に向けた基盤学問体系としての化学工学の解説など、大特集では取り組み難しいテーマについては小特集として計画を進めています。来年度からは「ダイバーシティー」を男女共同参画委員会からの記事だけでなく、より広く編集委員より募り、文字通りのダイバーシティーを目指します。また大学の学科名から判断できなくなった化学工学系の研究室を毎号紹介することで、研究や人材の交流を促進したいと考えています。

前宣伝ではありますが、平成31年新春号では大特集「輝ける近未来社会の実現を担う化学工学会を目指して」と小特集「社会実装学とこれからの化学工学」の大型連動企画を上ノ山周委員と前田治彦委員が中心に取りまとめています。大特集では阿尻雅文新会長と前一廣元会長の特別対談とVISION2023の話題を中心に「新たな化学工学像」と題した座談会を予定しています。また化学工学を修め各界のトップに立った方々に寄稿をお願いし、多角的に化学工学会の未来を議論します。是非とも新春号をご期待ください。

来年度は化工誌のWEB化が大きな課題であり、それ以外にも細かな課題は山積みになっています。今になって重責をひしひしと感じ、引き受けたことを後悔しておりますが、少しでも化工誌が読者に愛される学会誌になるよう努力していきたいと思っております。会員の皆さまには、化工誌が読者の研究発展につながるための情報発信源として機能しますように、特集や連載などについてもご意見やご希望をお寄せいただければ幸いです。

最後に年鑑の執筆や編集作業には大変多くの方々にご協力いただきました。本紙面をお借りし御礼申し上げます。



## \*\*平成30年度年鑑編集WG

長田光正(信州大学)、高井 努(アズビル)、中澤 光(東北大学)、原 伸生(産総研)、牧 泰輔(京都大学)

\*群馬大学大学院理工学部環境創生部門 准教授、平成29、30年度化工誌編集副委員長